

島根原発

# 広域避難の課題

■ 1 ■

中国電力島根原発(松江市鹿島町片匂)の事故を想定し、島根、鳥取両県や原発30キロ圏内の6市が、広域避難計画の精査を進めている。福島第1原発事故の教訓や、5月末に公表した避難所要時間推計からは、住民への避難計画の事前周知や、要援護者の対策などさまざまな課題が浮かび上がった。実効性を上げるための道筋を探る。

福島第1原発事故が発生、斉に避難した車加わり、した翌朝の2011年3月 最大20キロ程度の激しい渋滞12日午前6時50分。同原発を起こした。100キロ進むから南に7キロの福島県富岡の1時間以上かかったと町役場で、町職員が防災行政無線で町民1万6千人に避難を呼び掛けた。

国が3〜10キロ圏内の住民に対して避難指示を出したことをテレビで知った当時町長が、独自に判断した。町内は10キロ圏外の地域もあるが、対応を区分けする余裕はなかった。

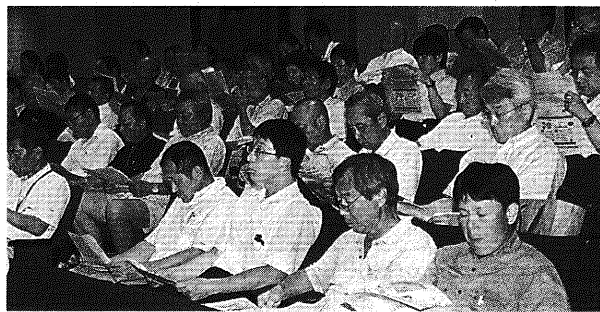
しかし、避難先となった西隣の同県川内村に向かう県道は他の町から一

## 住民周知

渋滞招く「我先に」

島根、鳥取両県が公表した島根原発からの避難所要

# あらゆる経路通じ伝達を



時間推計では、一斉避難のリスクが明らかになった。平日の昼間に30キロ圏内の住民47万人の9割が自家用車やバスで同圏外に避難するの、5キロ圏内の要援護者から段階的に避難した場合は27時間50分、一斉避難は6時間早い21時間45分と試算した。

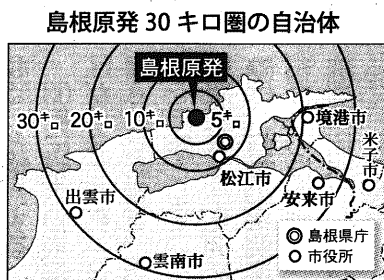
一見、一斉避難が良い選択にみえるが、原発に近い5キロ圏内の住民が大きな影響を受ける。段階的避難では、要援護者が30キロ圏外へ避難するのに3時間かかるのに対し、一斉避難では約

3・7倍の11時間5分を要する。「我先に」の行動が渋滞を悪化させ、被ばくリスクを高めてしまう。

## 学生には伝わらず

広域避難計画の実効性を高めるには、段階的避難の大切さを圏域住民に理解してもらわなければならない。だが、それは容易なことではない。

「どこに避難するか知らない」。松江市西川津町で1人暮らしをする、島根大総合理工学部4年の池西宏顕さん(24)は不安を口に



松江市が開いた広域避難計画の住民説明会で、計画の概要を聞く市民。松江市鹿島町左陀本郷、鹿島文化ホール

した。

大学で避難先を知らされることもなければ、自治会にも加入していない。松江市は、県の計画を基に3月に市の計画をまとめ、概要版を市報に挟んで配布したが、手元に届いていない。愛媛県の実家から住民票を移しておらず「47万人」に数えられていない1人だ。

市は8日の鹿島町内を皮切りに、公民館単位での住民説明会を進めており、主に自治会を通じて参加を呼び掛けている。

しかし、大学のある川津地区(7367世帯)の自治会の加入率は43・9%(13年4月)。川津公民館の池田昭夫館長(61)は「学生の把握ができず周知が難しい」と話し、大学の防災体制についての情報交換を検討している。

松江高専の浅田純作教授(51)「災害社会工学」は「複数の経路で計画を伝えることが大事だ。学校、企業などを通じて説明するなど、あらゆる方法を使う必要がある」と指摘する。